

「影と闇と光の狭間でただ一人奮闘を続けた大いなる男の叙事詩」

岡和田晃

男の額には決死の汗がにじんでいた。

まるで何かに追われるかのように、必死で走ってゆく。

何のために？

男は沈黙の内に答える。理由などには必要ないのだと。

ただひたすら、男は駆けて行く。さっそうと、飛ぶが如く。

その速度は音速を越え、今や光をも凌駕しようとしている。

全身全霊の力を振り絞り、彼は、走り続けた。

それは、まさに、永劫の時の呪縛を解き放つ唯一の光明のようであった。

ああ、人の虚しさよ。

懸命に、懸命に、それでも彼は走り続けている。

だが、彼の体はもはや限界に達していた。彼の体を蝕む毒は、すでに彼の全身にまわろうとしていた。

とうとう、彼は寒風吹きすさぶ荒野の中、倒れた。

くそつ、もうこれまでか……。

神よ、どうか我に御慈悲を……。男の目から一筋の涙がこぼれた。
と、彼に、なぜだか新しい闘志が湧いてきた。

こんな所で負けてどうする。

お前の実力はそんなものだったのか！

「違う！」彼は叫んだ。

「俺は、俺は……」かすれて声にならない。

やがて、彼はゆっくりと立ち上がった。

だが、今までの彼とは何かが違う。

そう、今や彼は数多の苦難を乗り越えた王者の風格を身に付けていた。

雷鳴が轟く中、彼は吠えた。

「嵐よ、来るなら来い！ 何人たりとも俺のゆくてを阻むことはできん！」

そして、彼は再び走り始めた。

そんな彼をあざ笑うかのように、風はますます強くなっていく。

暗雲が辺りを包み、悪魔が彼の耳元で誘惑の言葉を囁く。

だが、もう彼はくじけなかった。

彼の鉄の意志は誰も打ち破ることができなかつた。

目的の場所が見えてきたのだ。

あそこにさえたどりつければ、今までの苦勞が全て報われる……。

だが、またはもや運命は彼に対して大きな試練を与えたのだつた。

突然、神の槍、グングニルで腹を突かれたかのような激痛がはしつた。

毒は未だ拭い去られていなかったようだ。

彼は死を覚悟した。

全身の氣力が否応なしに抜けてゆく。

だめだ！

ここであきらめては、いったい何のために俺はここまで戦いぬいてきたというのだ。

ここで倒れるというのが、たとえ神の御意志といえども、それに従うわけにはいかぬ

のだ！

かの偉大なるメロスを見よ、彼は、友情のために自らの命も顧みずに走つた。

俺がこんなところで負けてどうする！

彼は必死で自分を叱咤し、立ち上がろうとした。

だが、体がいうことを聞かない。

「おお、何ということだ、呪わしき我が体よ！ ああ、天よ、地よ、精霊よ、どうか、どうか、このベルジュ・ヴァンズの体に、今一度、今一度活力を与えたまえ！」

ベルジュは雄叫びをあげた。その声は、天地に多大な鳴動を与えるかのようにであった。いったいどこにそんな力が残されていたというのだ……。

驚くべきことに、彼は立ち上がることができた。

奇跡だ、奇跡がついに起きたのだ！

暗雲の間から一筋の光が差し込んだ。

神の御加護だ！

そして、彼は、ゆっくりと、しかし確かな足取りで、一步一步、目的地へと近づいていった。

目の前に、建物がそびえ立っている。

とうとう、ここまでたどり着いたのだ！

彼は、感動のあまり慟哭した。

思えば長い道程であった。

だが、ついにベルジュは勝つたのだ。

今、彼は勝利者だった。そして、彼はその建物の中へ入っていき、静かなる余韻を囁

み締めた。

あとに残るのは、静かな、小川のせせらぎのような水の音。
そして、すつきりと晴れわたった彼の笑顔だけであった。

(2XXX年某月某日、市内の公園の公衆便所より実況生中継)

初出「TILL」(第2期創刊号、新風舎、1998年10月)

シヨートシヨート・コンテスト「短いのが好き？」入選作品(選者…藤井青銅)
※再掲にあたって、一部の誤記を修正した。